

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	1311051000743
施設名	アソシエ学芸大学南保育園
施設所在地	目黒区鷹番1-15-19
法人名	株式会社アソシエ・インターナショナル

1. 活動のテーマ

<テーマ>

音

<テーマの設定理由>

・日々の遊びや生活の中で、子どもたちは楽器の音や身近な物から出る音に興味を示し、「どんな音がするのだろう」と試したり、気づいた音を友だちや保育者に伝えたりする姿が多く見られる。本園では、こうした子どもの気づきや発見を大切に受け止め、音に触れられる環境を整えてきたことが強みである。これらの姿から、子どもたちが音に強い興味・関心を持っていると判断し、すくわくプログラムのテーマとして「音」を選定した。

2. 活動スケジュール

令和7年12月～令和8年3月

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

・「この音なんだろう?」「この音はどこから聞こえる?」「どうしてこの音が聞こえるんだろう?」を問いかけた際、子どもたちからの音に対しての興味もあったため、その問いかけに対し、さらに興味関心が持てるような言葉掛けもしていった。

◎物的環境 (音に出会える素材を準備する)

- ・楽器: 太鼓、鈴、カスタネット、木琴
- ・身近な物: 空き箱、ペットボトル、缶、紙コップ、スプーン、木の棒、布、アルミホイル
- ・自然物: 石、枝、葉っぱ、砂
- ・録音機器: タブレット、ICレコーダー (音を残す体験)

◎空間の工夫

- ・音を出してよいコーナー
- ・静かに音を聴くコーナー
- ・外 (散歩先) での音探し
- ・壁に「音マップ」「音の写真」を掲示

◎人的環境

- ・保育者が一緒に驚く・楽しむ
- ・友だち同士で試す時間を十分に確保
- ・異年齢での関わり (音の感じ方の違い)

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

活動① 音がし
・園内・散歩先で音を探す ・「カーン」「サラサラ」「ドン」など擬音語で表現 ・録音して聞き比べる
活動② 音をつくる
・同じ素材で叩き方を変える ・中身を変えて音の違いを比べる ・強さ・速さを変えて実験 ・手作り楽器を作って演奏してみる
活動③ 音を比べる・分類する
・大きい音／小さい音 ・高い音／低い音 ・好きな音／びっくりする音
活動④ 音を表現する
・楽器を演奏してみる ・音を別の方法で（描く・体を動かす） 表現してみる ・記録の方法 ・写真（活動の様子） ・子どもの言葉をそのまま記録 ・保育者の気づきメモ ・音の録音データ ・子どもの絵やマーク

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

（活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等）

（活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等）
①戸外活動で公園に行った際に、石を見つけた子どもたち。遊具の柱に石を打ち付けて音が鳴ることを発見し、他児にも「音が鳴るよ」と声を掛けて数人で音を鳴らして楽しんでいた。 保育者が「ほかのところはどんな音がするかな？」と声を掛けるといろんな場所を石でたたいて「ここはこんな音がするね!」と音を鳴らして音の違いを楽しんでいた。 乳児クラスでもピアノの音に興味津々で、楽器自体をのぞき込んだり音が鳴ると体を揺らしてリズムを取る様子が見られる。保育者が手をぱちぱちたたいたり音のなるものを鳴らすと同じ動きをして音を鳴らすことを楽しむ姿も見られる。
②叩く素材を変更しても音が変わることを発見したため、石だけではなく、色々な素材（枝・砂場玩具）でたたいたり、たたく場所の素材が変わる（金属（鉄やステンレス）から強化プラスチックなど）と音が変化することに気づき、様々な音を鳴らして変化を楽しむ様子が見られた。戸外での音探しでは子どもたち自身が素材を探しており、素材を探すことも楽しんでいる様子が見られた。
③使う素材によって音の変化や音色などが変わることにより、色々な素材を組み合わせてみたり、楽器同士を合わせてどんな音がするかを試していたり、息の入れ方で音量が変わることなどに気づき自分たちでいろいろな方法を試しながら音を鳴らす様子が見られる。
④様々な楽器（民族楽器など）を用意し、楽器によっていろいろな音が鳴ることを知る。保育者より持ち方や音の鳴らし方を伝え、子どもたちが様々な楽器に触れ自分で音を出してみる。同じ楽器によっても大きさが違うと音が違うことや鳴らし方によっても音の変化がつくことに子どもたち自身が気づき、自分たちで工夫しながら音の大小や強弱をつける様子も見られた。またその気づきを他児と共有することで新たな音を発見したりする様子が見られた。また、用意できなかった楽器以外にも世界にはたくさんの楽器があることへの興味関心を深める為、楽器の図鑑や写真などを用意し、子どもたち自身が調べられるような環境設定を行った。
最終的に、幼児クラスの子どもたち発信で色々な楽器で音を合わせることを楽しむ姿が見られるようになり、簡易的な合奏が行われるようになった。「みんなに見てもらいたい・聞いてもらいたい」という気持ちが大きくなってきたようで保育者にも「みんなに聞いてもらいたい」と話があった。そのため、子どもたちで簡単な演奏会をおこない、他クラスの子どもたちにも聞いてもらう場を設けた。この経験から幼児クラスは音を表現し、聞いてもらう楽しさも知ることが出来、小さいクラスの子どもたちは楽器や音への興味関心がより出てきたように感じる。

活動の様子(別紙参照)

5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

今までは幼児期から楽器に触れ合奏などに取り組む場合は、最初から楽器に触れて合奏をすることを目指していたが、今回のすくわくプログラムに参加することで、保育者は、幼児期の最初から合奏を目的として活動を進めるのではなく、乳児期から子どもたちが様々な音にまず興味を持ち、様々な素材を使い遊びの中で音を鳴らすことやどんな音がするかなどの音を探し鳴らすことを楽しんだのち、自由に楽器に触れたり、自ら音を鳴らし楽しむ時間を十分に保障することの大切さを学んだ。乳児期からの様々な音への興味関心を持てるような環境設定や保育者からの声掛けが重要であると感じる。幼児期より子どもたちは、自分で楽器を選び、さまざまな音や鳴らし方を試す中で興味や関心を深めており、その過程が主体的な活動意欲につながっていることに気付いた。また、保育者が子どもの発見や思いに寄り添いながら見守ることで、友だちへの関心や「一緒にやってみたい」という気持ちが自然に育まれることも分かった。今回の活動を通して、保育者主導で活動を進めるのではなく、子どもたち一人ひとりの興味や意欲を尊重し、自発的な関わりを支えることが、結果として意欲的な音への探究活動につながることを実感した。また子どもたちの意欲的な探究活動から年下の子へも伝えたい・見てもらいたいという気持ちも見られるようになってきた。その姿を見た年下の子どもたちにも音への興味関心が深まっていったと感じている。今年度予定していた活動全ては取り組むことが出来なかったが、来年度も継続して音への探究活動をする中で取り入れていく予定である。今後も子どもたちの興味や気持ちの変化を丁寧に捉えながら、主体的な表現活動を支えていきたい。